

研究生生活の歩み

——中国佛教研究に着手したところ——

横 超 慧 日

関インド哲学の方は高楠順次郎先生。この先生から梵語の入門を教わった。教科書は荻原雲来先生の『実習梵語学』でした。「ここは簡潔に分り易く言うところいうことだ」と言っただけの十字か十五字ぐらいで要点だけを黒板に書いて、「後は読んどきたまえ」と言っただけの後には雑談ばかり。けれど却って肝心の梵語の方より、私なんかその雑談の方が印象に残っている。例えば、日光という名前。あれは佛教で言うフダラク山からきた言葉と言われる。観音さんの住所であるポータラカは漢字で補陀洛「フダーラク」と書くでしょう。フダは二つ、アラは荒だから、「フダ・アラク」は漢字で書けば「二荒」となる。ところが二荒という字は「ニコウ」と読めるから、そこで「二荒」と書く代りに「日光」と書くようになった。だから「日光」はもとは「フダラク山」から来た言葉だ、ということも教えてもらいました。

それから将棋の駒のこと。サンスクリットの授業に将棋の駒の説明なんかをされる。「金や銀や歩は誰もわかるし、桂馬も飛車も戦争に欠かせぬ武器だということ、これは説明するまでもないだろう。じゃあ角は何だ。ということになると、角は何だかわかりますか。」僕は今でも将棋は知らんけれども、角が一番強いそうだが、高楠先生は、あれ

は象なんだ、象という字を古い書体で書いているうちに角になってしまったと言われる。こんなわけで高楠先生の授業はみんなとても楽しんで出ておりました。

高楠先生の業績ということになると、こんなところで私などが言い尽くせるものでないから省略しますが、何と言つても大正大藏經の刊行を發起して日本佛教学界の地位を世界的に發揮されたこと、東京大学に梵語講座を開設して印度哲学・印度文学の基礎を築かれたこと、ヨーロッパの学者と交流を深められた先生は御自身が漢訳經典や中国・日本の独自の佛教学績にも深い蘊蓄を持つておられたために西欧の学者たちの及ばぬ独自の領域を宣揚されたこと、それから更に門下に多くの英才を養つて宗門立大学だけに依存していたこれまでの佛教学の地位を広く全世界的な学界の中に確立する基盤を打ち樹てられたことなど、数えあげればきりがありません。しかし以上挙げたことなどは、印度哲学や佛教学を学んでいる人なら、多かれ少かれ誰も知らぬものはないでしょう。ここで私は先生が、佛誕二千五百年という大きな祝典を企画されたあの見識・信念については非一言触れておきたいと思います。今日では世界中隔々にまで西曆紀元が普及しておつて、それはイエス・キリストの生誕年時に関わるものであるから、キリスト教徒でなくとも、キリストが生まれて以来凡そどれ程の年が経ったかを知らぬものはありません。だがそれなら佛教の教祖釈尊はどうかというところ、釈尊は今から何年位前に出られた方でしょうか。佛教徒であり信仰の篤い研究者であっても、即座にそれが答えられぬのが実状でないでしょうか。それはインドという国が古来歴史を記録するよりも冥想的思索に重きをおいてきたという国情や、西欧や中国などとの交通が久しく開けないまま独自の文化を發揚したということにも由るのですが、佛教徒としては教祖釈尊の生年・寂年何も知らぬままでいてよいものでしょうか。そんなことでは歴史の出発点が見出せないだけでなく、信仰的にも慚愧に堪えぬではありませんか。もちろん、佛教の各宗では夫々伝承された説を祖師の著作などの中に保存してはいますが、今日の歴史学の上からは余りに年代がかけはなれ到底承認されることはできません。そうかと言つて学者の研究結果を待っていると、諸説が起つてなかなか一致せず、

次々に新説によって修正されてゆくことになり、確定的に絶対不変な定説に落ちつくのは期し難い。そこで高楠先生は中国を経由して知られた衆聖点記の説に由る他ないとし、それに基いて昭和九年の十二月に、日本の学界が宗派を離れて佛誕二千五百年の記念式典を催すことを提唱されました。その時の会長は井上哲次郎先生でしたが、一番の中心は何と言っても高楠先生だったのです。東京大学で佛教学会の大会が開かれ、帝国ホテルで式典や祝賀会が催されたこと、日本劇場で早川雪州の釈尊劇が演ぜられたことなど、私には脳裏にしみこんでいつまでも忘れられぬ思出の種です。今日では宇井先生の説や中村元博士の説で、釈尊の出世年代は衆聖点記に由る年代より凡そ百年程下つていますけれど、そんならその新説が学界人の中にどれだけ浸透し普及しているでしょうか。私は学者が冷静に感情を離れて歴史的な正確さを求めることを決して軽んずるものではありませんが、高楠先生が全佛教徒の間に釈尊に対する不変の崇敬の拠点を樹立しようとせられた、その学問と信仰との相関を求める心情は今後も忘れてならぬところだと思ふのであります。

ついでに申しますと、私は手許に高楠先生が東京大学を定年退職された昭和二年の記念写真を持っております。それを見ると、印度哲学の高楠先生、宗教学の姉崎先生、偶々来日しておられたシルバン・レビー博士、を初めとし、木村泰賢、常盤大定、矢吹慶輝、荻原雲来、長井真琴、椎尾弁匡、池田澄達、小野清一郎等の諸傾学が先生を囲んで写っておられ、併せてそれら諸先生の一人一人の上にも私は五十七年前の往時を偲び、無量の感慨を禁ずることができません。これらの諸先生についてもいろいろ思出深いことがありますけれども、今は大学で直接教を受けた佛教学の先生方のことだけに止めさせて頂きます。

さて、話は戻って、大学の方ですが、高楠先生は私が二年生になった時、先生はもう定年でおやめになりました。その後任はヨーロッパの留学から帰って来られた福島直四郎先生で、先生は間もなく辻姓にかわられました。実にもう頭の鋭い方でありました。高楠先生とは様子が大分違っていた。高楠先生の時には大変楽しい授業でしたが、辻先

生になると一時間中気の休む暇がありませんでした。あの時に教わったテキストはナラ王物語だったように記憶していますが、今では何もかもすっかり忘れてしまいました。

私も二年生の時に島地先生が亡くなって、その後に入って来られたのが加藤精神先生でした。真言宗の豊山派の方ですから長谷寺系統の方です。加藤精神先生の講義は弘法大師の『秘蔵宝鑰』を聞きました。弘法大師の一番の主著、親鸞聖人でいえば『教行信証』に当るのが『十住心論』ですが、その『十住心論』をもっと簡潔にして要点を述べたものが『秘蔵宝鑰』です。その講義を聞きました。

弘法大師というと今では何だかカビが生えたような、古臭いと思う人があるかも知れんが、あの時代に弘法大師と言えば世界中の尖端を行く学者だったんですね。弘法大師は伝教大師と一緒に中国へ留学されたけれども、伝教大師の方はひたすら求道精神の立場から「私は天台宗を学びたい。天台宗を学ぶ為には天台山へ行かなければいかん」と言ってそこへ行ってすぐ帰ってきておられる。折角中国へ渡りながら辺地の天台山で学んだだけで帰ってきてしまった。それに比べると、弘法大師の方は長安へ行き、そこでゆっくり勉強してこられた。当時長安と言えば世界中の文化の中心です。そこで最新の仏教であるところの密教を学び、しかも密教だけでなく文学的なもの、芸術的なものも身につけて日本へ帰ってこられた。字もうまいし文章もうまい。『秘蔵宝鑰』など、声を出し節をつけて朗誦したいような文章です。

私は卒業論文を書く時に、次男坊だけれども寺院出身ですから、仏教を学びたい。仏教をやるならその中でも鎌倉仏教を中心にしたいと思ったんです。すると指導教授の常盤先生が「村上專精先生のお弟子に支那仏教を専門にする境野黄洋君と日本仏教を専門にやっている鷲尾順敬君がいる。鷲尾君は東京大学の史料編纂所におるからそこへ行って指導を受けてこい」と言われる。禅宗の語録を読むことにかけては、あの当時鷲尾先生の右に出る人はなかったのですが、ともかく日本佛教研究の權威であることは確かですから、私は常盤先生から紹介の名刺を貰って鷲尾先生

の所へ行った。「私は日本佛教を専攻したいと思いますが、どのような所から手をついたら宜しいでしょうか。手をつける所が大事だと思います」「あゝそうか。まあいいことだ。けれどもね君。日本佛教というものは、鎌倉時代の各宗の高僧のことや当時の社会情勢ということも大事な課題だが、鎌倉佛教の母胎たる平安時代の中古天台を知らなきゃ話にならない。中古天台の性格を知ろうと思えば、鎌倉以前は全部密教で塗り潰されているから、まず密教をやるのが肝要だ。つまり弘法大師から始めなければいかん。だからどうしてもまず弘法大師から始めたまえ。だがそれにはその前に奈良時代の南都六宗の総締括りをして日本佛教展開の地盤を作っておいた天台宗の伝教大師の信仰学問を確かめておくのが必要だ」と、そう言われて、私は天台宗の伝教大師を勉強の第一歩にすることにしました。『山家学生式』を基にしてできた『顕戒論』を卒業論文で主要課題としました。皆さんの中に一寸でも日本仏教を覗いてみようという方があったら、何が何でもまず『顕戒論』を絶対に忘れず見て欲しい。あれが日本の佛教の性格を決める一番の出発点になっていますからね。

その当時東京で伝教大師の研究者と言ったら『伝教大師研究』という雑誌を出して、一人で一所懸命に努力しておられた塩入亮忠という人があった。この塩入亮忠先生の所へよく出入りしたものです。だが何と言っても天台宗の円頓戒と台密のことに於て当時の学界に名声の高かったのは福田堯顕という先生だと聞いたので、私は谷中におられるこの先生の所へ足繁く通うようになりました。先生は独身でした。家庭生活をしたことのない人です。一人だけで住んでいるんですけども、私のような一知半解の学生が訪ねてくるのに、部屋へ入れて逢う時には必ず衣を着て会われる。普通私共だったらくら衣を着ても家へ帰ると浴衣に着代へたりするけれど、そういうことはない。応接間へ通して必ず白衣の上に法衣を着て僕に会うんです。

そこへ訪ねて行って「私は伝教大師の『顕戒論』を学びたいと思いますが、註釈書や参考書やまた研究論文などにどういうものがありますでしょうか。勉強の仕方もお教え願いたいと存じます」と言ったら、『顕戒論』をやるのだった

ら出版はされていないけれども、私が前にプリントで刷ったものがあるから、これを貸して上げよう」と言って、貴重な蔵書をまことに心安く貸して下さる。ほんとにそれは親切な先生でした。

本を借りて写したりして後で返しに行った時に先生に会えなかったりすると、後から丁寧な手紙が来る。借りてくるときには「××お借りします」というふうにな刺に書いておくんですが、その名刺と一緒に手紙が来る。その手紙を私は今でも大事に保存していますが、楷書ですよ。字を見ると人柄が分ると言うが、まことに謹厳そのものでした。本当に福田堯顕先生の人柄は今でも忘れられません。偉い先生に会うことができたことを喜んでおります。

その福田先生が「天台宗というのは天台大師から伝教大師に入る。伝教大師から日本の中古天台、それから例えば江戸時代に安楽騒動などということがある。だからその長い歴史の中で、それではどが天台宗の教義かということを決めねばならんとなると、全く即座に決められず非常に困るんですよ。」と言われました。思いがけない内面的な苦悶を漏されたことを私は今も憶えておることです。

そういうことで私は大正十五年に入學して昭和四年に卒業しました。昭和五年私が大学院の時木村先生が亡くなられ、東北大学から宇井先生が後任としてられました。宇井先生からは真諦訳『撰大乘論』の講義を聞きました。宇井先生の唯識は玄奘の唯識とは違った新しい感覚に満ちたものでした。私は木村先生の所へよく訪ねて行きましたが、宇井先生の所へもお邪魔しました。「君は支那佛教を学んでいるんだな。支那佛教をやるには是非ともしっかり道安をやらなきゃ駄目だよ」と言って注意して下さいました。私が道安を研究するようになったのは『出三蔵記集』の経序を読んでいるうちに道安の堅固な道心に動かされたことが一番の原因ですが、一面、宇井先生の指導が頭の中にしみ込んでいたことも大きく影響した為と思われます。しかし、宇井先生は何と言ってもインド哲学の学者、インド仏教の学者ですから、道安を研究するに当って、その背景となっている儒家道家の思想や六朝文学など十分考察されるよう期待するのは無理なことでした。

宇井先生は曹洞宗の方でした。『禅宗史研究』という本を書いておられる。又、『支那佛教史』というものも出しておられる。こうしてインドから中国にわたり、また禅宗の歴史についても著書を出しておられるが、専門は何と言ってもインドの方でした。宇井先生による何かの講演会の時に、こういうことがあったことを覚えております。「佛教学界の最高の権威者であられる宇井先生の御講演を、これからお聞きすることに致します」と紹介されたあと、壇に上った先生は、開口一番こういう意味のことを言われました。「只今御紹介いただきました宇井です。佛教学界の権威だなんて言われましたけれども、私は佛教だけを学んでいる者ではございません。私はインド宗教全体を研究しておる者ですから、どうぞお間違えのないように」と。こういうお言葉の中に、学的地盤の広さとその気魄がうかがわれるではありませんか。

宇井先生は僧侶出身でしたが、僧侶は勝手にものごとを決めこんでしまうからというので、坊さん中心の学問を嫌っておられました。ですから、東大の中でも佛教学を含む印哲の講座に教授となった先生方は、たいてい最初のうちは東西本願寺だとか、禅宗や浄土宗などの寺院出身の方たちでしたが、宇井先生以後になるとその傾向が著しく改められてきたように思われます。

私は大学院時代に伝教大師の最大の著作『守護国界章』を研究しました。題だけ見ると何か国を守る為の祈禱のようなものだと思われるかも知れませんが、そうじゃない。非常に難しく、しかも確固たる信念の上に立ってはいるけれども、一宗一派に偏した学問書ではない。天台宗、華嚴宗、三論宗など一乗佛教の立場から三乗差別に立つ唯識宗の教を批判して、あれは佛教の中では方便の教であって真実の教ではないと主張し、唯識の立場に立つ法相宗の徳一と大論争を展開された本です。だいたい論争するためには自分の主張ばかり言っている論争にならない。相手の言うことをちゃんと心得ておいて、向うがこう言ったらここをこう衝いて論破しようと初めから用意ができてなければならぬ。そういうわけで、自説を主張するには相手の論理と根拠とを十分承知した上でなければ論争にならないので

す。だから当時学界に優勢を誇った唯識宗の代表、徳一法師に対抗された伝教大師としては、天台宗や華嚴宗や三論宗はもちろんのこと唯識宗についても深い造詣に立って論を進めなければならなかった。そうすると『守護国界章』を研究し始めたら、天台だけでは話にならず、それに対抗する唯識も十分研究してかからぬことには理解できない。エライことになっちゃってね……。

あの当時は論文を出さなければ修士修了にならないということとはなかったですから、誰も論文を出す者はなかったです。私も二年間でレポートを出しただけで論文というほどのものを出さずに終わりました。『伝教大師の『守護国界章』を研究していると、内容は中国佛教ばかりだから、これは中国佛教を専攻しなければ話にならぬと考え、とうとう中国佛教研究に鞍替えすることになってしまいました。

丁度その当時聖徳太子奉讃会という会があって、そこは、法隆寺を中心にする学者の集りでありました。私はその会の研究生にしてみました。聖徳太子奉讃会の研究生になると、一方では学生であり独身でありながら研究費が頂けたので、研究に必要な書籍は大分思い通りに買いこむことができました。

私より二年先輩に結城令聞氏がいました。結城さんは金もある上に学者の家で、漢学の方の本などたくさん揃えておられた。だが、僕は買わなければならぬ。だからなるべく安く役立本を手に入れるように心がけました。当時中国では金陵刻經処を初め方々で佛書が刊行されており、郵便で注文すればいくらでも手に入れることができました。文字の国中国のことですから校正は厳重です。誤植なんてことは絶対ない。それに活字が大きく、句読点の打ち方の厳密なことは、さすが本場の出版だと感心していました。返り点はもちろん打っていないが、返り点など打っていないからいいんですよ。返り点が打ってあると、いつまでたってもそればかりに頼って、なかなか漢文が読めるようにならない。白文を読んでいると最初は読めなくてもだんだん判るようになる。勘で判るようになる。だから私は北平や上海の佛經流通処を通して、金陵經処版など中国出版の佛書をどんどんと買いました。当時の為替相場の関係で

安く買えました。おそらく私はあの当時日本で中国刊本の恩恵を蒙ること最も大きかった一人だと思っています。

聖徳太子奉賛会が済んでから東方文化学院東京研究所というのに入りました。東方文化学院というのは、東方文化研究の長老碩学たちが、外務省の援助の下に東京と京都に一つずつの研究所を設けて昭和四年から発足した主として中国文化を研究する機関でした。中国のことを研究する関連の施設として、上海には自然科学研究所、北京には人文科学研究所があり、そして東京と京都に東方文化学院研究所があったのです。東京の研究所は初め東京大学の中に間借りをしておりました。

東方文化学院は学校ではなくて研究所です。半官半民で、お金は外務省から出るけれどもそれを使うのは外務省の指令通りじゃなくて、理事評議員の組織があって運営されていました。京都の研究所長は狩野直喜先生、東京の研究所長は服部宇之吉先生でした。理事会、評議員会の議を経て研究員や助手が採用され、評議員で研究員を兼ねておられる方もかなりありました。私も入った当初は助手だったけれども、二、三年過ぎてから研究員になりました。

研究員の一番先輩は中国佛教学で唯識を主とする結城令聞氏と東洋建築の方で竹島卓一氏という人がおりました。結城さんは常盤先生の弟子であり、竹島さんは関野貞という東洋建築史で非常に有名な先生のお弟子でした。それから『歴代地名要覧』を作った青山定雄氏、中国の社会組織のことを専門にしていた牧野巽氏。いま中東考古学の方で非常に鳴らしている江上波夫氏。それに滝精一という絵画史の先生の息子さんで支那の楽器のことを調べている滝遼一氏などがいました。

私は最初は中国の唯識や華嚴の辺りを一生懸命に読んだが、唯識・華嚴を読んでいると今度は『撰大乘論』の大事なことが知られるようになり、進んで又、『十地経論』もはっておけぬことになる。華嚴の前の唯識、その前の天台、三論というようにだんだん遡って、中国へ佛教が入って来た最初の頃から初めなかったら、外来宗教の佛教が中国に根を下ろして、終には中国内で佛教思想の内に対立が起こるまでに発展する経路がとても把握できぬことを気付くよ

うになってきました。そこでとうとう中国佛教の最初の道安の辺までいってしまいました。宇井先生から「道安をやらなきゃ駄目だよ」と言われましたが、やはり道安ということになるんだなと思いました。

研究所にいて『智度論』も『瑜伽論』も読みました。『大毘婆沙論』は中国版の本を買わなかったので大正大蔵經本で読みました。研究所生活というものは何も仕事がないから何よりも先ずどんな読むことが仕事でした。朱墨を持って、読んでは朱を打って行く。その為のテキストは中国から買った。この中国版がなかったらいくら研究費を貰ってもとても間に合わなかったことでしょう。だからあの当時僕が使ったのはそういう本ばかりだったのです。

その後家庭生活をするようになってからは月給で食っていかなければならないから、とても本は買えなかったけれども、僕は研究所から大変な恩恵を受けたし、本当にいい先生に巡り合えたと思います。

研究所では毎月自分の専門とする学科関係の論文を批評紹介する会合が持たれました。又『支那佛教史学』という雑誌も東京京都の学者の協力で発刊され、東京でも京都でも毎月定まった研究会が持たれました。私は昭和二十四年に京都の大谷大学へ来て初めて教壇に立つことになりましたが、京都へ来てみると、塚本善隆先生が京都の人文科学研究所に居られ、丁度『弘明集』の研究会を初めたところだから、君も是非参加せよと勧めて下さって、その仲間に入れてもらいました。中国の儒教・道教・文学・歴史等の専門家と膝を交えて、初期の中国佛教研究を共同に進める機会を恵まれたことを、私は今非常に好運であったと喜んでいることです。その成果の『弘明集研究』や『肇論研究』『慧遠研究』など、昔学生時代に先生方から指導を受けてきた同志が、今度は互に切磋琢磨して学問の成果を築きあげることになったのであります。